

飯館牛のあゆみ

あぶくま街道風物史



あぶくま高地は、畜産が盛んなところ。なだらかで広大な大地とその気候が、牛たちを豊かに育て上げるのにちがいありません。飯館村ではその豊かな大自然の元、大切に飼育し、ブランド化とした特産の飯館牛がありました。あぶくまの地に飯館牛あり。そのあゆみをご紹介します。

人と村とが育む牛

飯館村には、飯館牛というブランド牛がありました。あぶroma地域はその風土から畜産が盛んで、たくさん牛が育てられています。ですが、ブランド牛として出荷されていたのは飯館の牛だけでした。

牛を育てる農家には、繁殖農家と肥育農家があります。繁殖農家は、出産から十ヶ月ほどまで育て、出荷します。それを肥育農家がセリで購入して、おいしい肉にして出荷します。

全国には幾多のブランド牛があります。東北の近県でも、米沢牛や仙台牛など、日本の牛肉のトップクラスに位置づけられています。ですが、小さな村で大切に育てられた飯館牛は、あぶroma地域の大切なブランドでした。

繁殖から肉牛にして出荷するまで、一貫して牛を育てる農家は、意外に少ないものです。繁



ロマンチック街道

殖農家から牛を受け取った肥育農家は、それから二年ほど牛を育てます。これでは、牛がお金になるまでに三年を要します。繁殖と肥育と、一頭の牛を複数の農家が担当することで、定期的な収入とリスクを分散する、畜産業の知恵が生きています。

もともとあぶくま地域では、広大な農地を必要としない繁殖農家が一般的でした。ところが、あるとき、子牛の値段が暴落したことがあります。そんなとき、飯館村は子牛を買い支えて、農家の窮地を救ったのです。しかし今度は、買い支えた子牛の行き場がない。そこで飯館村は、子牛を肥育して自らのブランドの肉を生産する道を選んだのでした。いまから三十年ほど前のことでした。

その昔、牛は農耕仕事に携わる大事な労働力でした。当時の



育ての大地が広がっていました
人々の熱い思いがありました
飯館牛は、その集大成でした



あぶroma地域は軍馬の名産地で、労働力は高価な馬ではなく牛が担うものとされてきました。その後、軍馬の需要が減り、酪農が推進されるようになりました。ほかのあぶroma地域同様、飯館村でも、盛んに酪農が行われ、一時期の村では人より牛のほうが多いといわれたくらいです。

酪農は、多数の牛を飼って、毎日乳を搾りたいへんな農業です。同時に、おいしい肉を求める需要も増してきました。馬から酪農、そして和牛へ。時代の流れとともに飯館村で育つ家畜たちも変遷していきました。

今、村は全村避難の継続中で、畜産業の復興もまだまだこれから。美しい村で、再び牛と人がいきかい、そしてとろけるような飯館牛に舌鼓を打つ。その希望に向かって、村は一步ずつ前進しています。牛の歩みのように、ゆっくり、しかししっかりと。



なみえ・つしま



津島のかぼちや

あぶくま街道風物史



浪江町は東西に長い町で、津島地区は浪江町の左半分になります。気候が温暖な海の土地の恵み、標高が高い山あいの高原の自然、両方を兼ねそろえているところが浪江町の強みです。あたたかい海のそばで育てられたかぼちやを津島でまとめあげたかぼちやまんじゅうは、津島の力をたたえています。

黄色いハートの、味

津島村は、昭和三十一年に浪江町と合併し現在に至っています。津島はあぶroma地域の重要スポットで、いっぽう浪江町は太平洋に面した生粋の浜通りの町並みです。

浪江と津島、山と海、ふたつの自治体がひとつの道を歩むことで、それまでできなかったことが実現できたという事例があります。それが、このかぼちゃまんじゅうです。

津島地区では、地元で根付いた特産物をつくり出そうと腐心して、九重栗かぼちゃを素材としたおまんじゅうを作ろうということになりました。もちろん東日本震災以前の話です。

九重栗かぼちゃは、かぼちゃといえど、いわゆるかぼちゃとは一味もふた味もちがう、片栗粉のようにほくほくした食感のかぼちゃです。山あいの津島地

その土地で育つもの
その土地で生み出されるもの
地域の味には、地域の味わいがあります



ロマンチック街道

区では、このかほちゃでまんじゅうを作ろうという動きが始まりました。

もとはといえば、村の研修でつくり方を教えてもらってきたばあちゃんの言い伝えです。当時、浪江町津島には、こんなバイタリテイがあつたのです。

とはいえ、九重栗かほちゃは、おいしすぎるかほちゃでした。津島の山あいでも育てたこのかほちゃは、一年二年はともかく、三年目にはすっかり当地のイノシシの餌食となりました。どんな対策をしても、イノシシにとつては突進してしかるべきおいしさがあつたのです。

そこで津島のみなさんは、イノシシの行動範囲の及ばない海沿いのみなさんにかほちゃの栽培をお願いしました。浜の浪江で育てたかほちゃを、山の浪江で調理して、そしてできあがつ





たのが浪江町津島のかぼちゃまんじゅうです。

当初はまんじゅうの生地のみかぼちゃを使い、コントラストのきれいな小豆餡を入れていましたが、その後、餡の部分にも別のかぼちゃを使い、外から中身までかぼちゃの、かぼちゃまんじゅうが誕生し、浪江津島の特産品として自信を持って生産を進めていた矢先に起こったのが、東日本大震災でした。

津島では、かぼちゃまんじゅうを始め、当地でじゅうねん（食すれば十年長生きをするいわれからこの名がある）と呼ばれるエゴマを使った料理などが盛んで、じゅうねん餡のかぼちゃまんじゅうも開発中です。

元氣よく津島で暮らしたみなさんの活力から生まれてきた食文化。津島のみなさんの行動力と、その味わいは、あぶくまの味を残す、貴重な文化財となるにちがいありません。





かつらお

あぶくま街道風物史 葛尾大尽の夢の跡



大尽屋敷は、葛尾村の昔日の夢物語を垣間見せてくれます。葛尾村は、松本姓の多い地域。葛尾と長野県松本の縁の話や、大尽屋敷として葛尾で長く愛されたのはなぜだったのか。人形劇として語られた物語には、先代たちへの思いが描かれているようです。



400年前の村の故郷

葛尾には、たくさんさんの松本さんがいます。村の人の半分くらいが松本さんといわれるほど、ここには松本さんが多くいらっしやいます。

その、葛尾村の松本姓のルーツといわれているのが、葛尾大尽屋敷です。この屋敷は、葛尾大尽と呼ばれた松本三九郎なる人物が築いたものとされています。三九郎は生糸や製鉄で富を築き、これが葛尾大尽と呼ばれるようになった由縁です。

この松本三九郎は、実は松本好倉なる人物であったのではないかとという史実があり、そしてこの松本好倉は、信州、長野県坂城町にある葛尾城主だったという松本勘ヶ由介の孫でありました。

葛尾という村名も、葛尾に多い松本姓も、信州からこの地にやってきた人が多いからかもし



ロマンチック街道

れません。この松本三九郎、葛尾大尽は、その後十代にわたって葛尾で栄華を極めたといいますが。十代の葛尾大尽は、いずれも松本三九郎を名乗り、江戸時代から明治時代にかけて、村で繁栄を続けたのです。

最盛期は江戸時代中頃で、お隣の三春藩を始め、相馬藩や棚倉藩に大金を献上し、また高額の貸し付けをおこない、藩財政にも一部介入し、山林や酒造米、塩などの独占権を得ていたといわれています。

残念ながら、屋敷建物は明治初期に二度にわたって火災で焼失し、製鉄業の不振とともに栄華も過去の夢となっていくのですが、大尽三九郎の構築した庭園は、それはそれは見事なものであったというのが、近年の発掘調査で明らかになってきました。

表面は滑らかに美しく、隠れ



葛尾の圧倒的多数を占める松本さん
そのご先祖さまのお屋敷
葛尾村のルーツを探る空間でもあります



てしまう裏側は荒々しく、一心不乱に石工がノミをふるった見事な石垣は、今もその姿を残しています。

発掘では四十八棟あったと伝えられる蔵の基礎石や、近江八景庭園跡の全体が掘り出されていて、現在は葛尾大尽屋敷跡公園となっています。

震災前、この葛尾大尽をテーマに、人形劇が企画され、村民のみなさんによって上演されていました。代々の葛尾大尽と京都からやってきたお嫁さん、そして彼らの心をつかんでいく村の快活な娘たち。

信州の地からみどり豊かな村にやってきた大尽さまが、葛尾村で暮らす様子と歴史が、人形に託され演じられています。

葛尾大尽が開いた村の暮らしは、少しずつ姿形を変えながら、この地に根づいておりました。これまでも、そしてこれからも。



みやこじ



山、川、水、魚、都路

あぶくま街道風物史



阿武隈高地は、最も高い山で二〇〇メートル弱。個性豊かな、親しみやすい山々が連なっていて、気軽なハイキングには最適な地域でもありました。ここでは、さまざまな自然の、そのすべてが互いにかかわりを持ち、地域の味をかたち作っています。

山楽し水清く魚棲む

あぶロマ地域を南北に結ぶ国道三九九号線は、福島県浜通りと中通りをつなぐ街道です。あぶロマ地域の五市町村もまた、浜通と中通りに属する町村があります。あぶくま山系は、中通りと浜通の分水嶺でもあります。

都路は、かつては都路村と呼ばれた中通りの村落でした。現在は田村市の一番東側に位置する地域で、そのさらに東側は、立ち入りが制限されている大熊町につながります。

都路には日本一の山もあります。大きな川もない、あぶくま山系の中にある小さな村、それが都路村でした。しかしここには、あぶくま山系から導かれる透き通った水があり、隣接する町村との間には、気軽にハイキングができる山々があります。季節がよければ、そこにはあぶくまの自然を満喫しにくるみな



空があって大地があって川があり花がある
他にはなにもない
それはどんなに素晴らしいことだろう

さんの姿がありました。

中でも五十人山は、その山頂が一町歩もの広さを持つ芝生となっていて、ゆったりと登頂気分を味わうグループでにぎわいました。見晴らしもよく、標高八八三mと軽登山にはびつたりの世界だっただけです。

震災以降は、各種整備がされておらず、登山道を歩く方もめつきり少なくなっていますが、いつかまた、ツツジが咲き乱れる気持ちのいい山頂を楽しめる日が来るのを、都路つ子は心待ちにしています。

さて、そんなあぶくまの山々から注がれる水は、そこにしか住めない幻を我々に届けてくれました。それがイワナです。今でこそ、イワナの養殖は珍しくなく、釣り堀などでもイワナを見るのが多くなりましたが、もともとイワナは水のきれいな





上流域でしか生息できない幻の魚です。その幻の魚が、あぶくま山系ではこここで生息していました。このあたりでは人里の近くでもイワナの姿を認められるなど、イワナにとつて、このうえない環境であることがわかります。

イワナの養殖が一般的になったのは、そんなに昔のことではありません。日本で最初にイワナの養殖に成功したのは、一九七〇年代とされていますが、それからまもなく、都路でもイワナの養殖が始まりました。

都路には、行司ヶ滝や岩清水といった、水にまつわる名所がいくつもあります。今では絶滅危惧種に指定されることが多い梅花藻も、かつてはそここで見られたものでした。

どこにもある、そして今ではここしかない日本の原風景、それが都路のありがたみです。

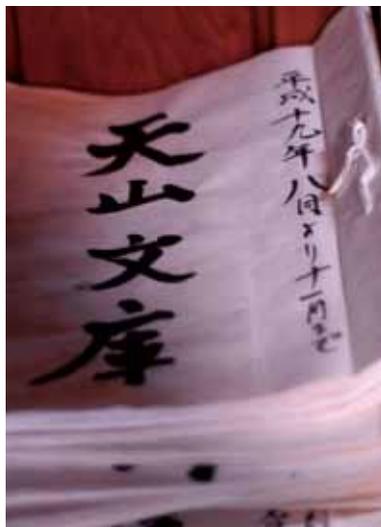




川内とカエル

あぶくま街道風物史

あぶくまのいちばん南、川内村。その南には、今はいわき市となった小川町がありました。詩人の草野心平の生まれ故郷ですが、川内村は、心平のこころのふるさとしていた。生前の心平と交流のあったひとともなかつたひとも、親しみと尊敬をこめて心平先生と呼びます。



あぶくま ABUKUMA ROMANTIC ROAD
ロマンチック街道

平伏沼と草野心平

かえるの詩人と呼ばれた草野心平は
天山文庫という安らぎを得て
村に多くを残していった

川内村は、詩人草野心平の終の故郷でした。創建五〇〇年にもなる長福寺の住職矢内俊晃さんの再三の呼びかけに応じて、心平が村を訪れたのは昭和二十八年。以来、この村で酒を呑む時間は、心平の人生の貴重な時間となつていきます。

天山文庫ができたのは、昭和四十一年。川内村名誉村民に選ばれた返礼にと心平が贈った蔵書の保管に、そして村を訪れる心平の憩いの棲家として、村人がつくりあげました。設計は建築家の山本勝巳。心平の交友関係の広さの一端です。

心平の生まれ故郷は川内村の南隣、いわき市小川町でした。しかし生前の心平は実の故郷より川内村の天山文庫をこよなく愛していました。その著作を見ると、川内村の田圃の畦には岩魚が泳いでいる驚きが綴られて



います。清らかな水は、川内村の宝です。

心平が愛したのは、岩魚にも増して、村の人々でした。役場の村長室には、心平直筆の書がかかっています。「村は人也」。村に住む人こそが、村の誇る財産であり、心平がここを訪れる原動力でした。

天山文庫には、心平と親交の厚かった名士たちの書などが多数保管されています。そんな財宝に囲まれながら、囲炉裏の前に酒を呑む。ここにすれば、心平が座り呑んだその場所で、窓の外の季節を楽しむことができます。

蛙の詩人と呼ばれた心平は、初来村の際に村はずれの奥地にある平伏沼を訪れています。ここ平伏沼は、モリアオガエルの繁殖地として昭和十六年に国の天然記念物に指定されました。





うまわるや
森の蛙は
阿武隈の
平伏の沼へ
水槽のかけ
草野心平



棟方志功の書による「天山道」

モリアオガエルは木の上に卵を産み、蛙の子は卵塊の中でオタマジャクシとなつてから、沼の中に降りていくのです。

梅雨の頃、沼の周囲の木という木には、モリアオガエルの卵塊が点々と見られるようになります。この様子が、平伏沼を天然記念物としたのです。

沼が蛙を呼び、蛙が草野心平を呼び、草野心平を慕う村人たちが、草野心平と川内村の絆を作り、今に至っています。

蛙はいつの時代でも蛙。東京から詩人がやってきて村人と酒を呑もうが、どこ吹く風です。

沼は、天候の不安定などで水が干上がりかけることがあります。近年の地震や原発事故は記憶に新しいところです。しかし沼の周囲でながあるうと、蛙のまままで生き続けています。



飯館村と浪江町は、国道 399 号線では行き来のできないお隣同士となっています。下左は除染が進む飯館村。こういった仮置場が飯館村には 87ヶ所あるとのこと。下右はあぶくまロマンチック街道石碑のひとつ。川内村役場前に建っています。

ぼっていき、小さな峠で田
 村市都路に入ります。小
 な集落を抜けると、都路行
 政局もある古道へ入ります。
 古道で一度右に曲がって国
 道二八八号線に合流します。
 この道を右折すると大熊
 へ。福島第一原発までは一
 直線ですが、現在はここか
 ら七キロほどにゲートがあ
 って立ち入り禁止区域と
 なっています。

ぼ一直線に北上します。
 葛尾村の中心街では、県
 道五〇号線とほぼ直交しま
 す。葛尾村役場の横を通過
 して、津島に向かって道は
 さらに北上します。村の境
 は峠となっていますが、葛
 尾村内の国道三九九号線は、
 南北ほぼ一直線です。
 大きくS字カーブを描い
 た先、村はずれに門があっ
 て、ここは開かずの扉です。
 許可証があっても抜けられ
 ません。浪江町津島に入る
 には、開閉可能な有人のゲー
 トを指す必要があります。
 今回は、県道五〇号線を国
 道三四九号線まで戻り、二
 本松市に入って国道四五九
 号線で浪江に向かい、許可
 証を提示してゲートの中に入
 りました。

浪江町町内は二〇一六年



三月現在、国道六号線と常磐高速自動車道をのぞく全域が金網の向こう側にあります。南の葛尾村との境、北の飯館村との境は峠になっていますが、津島の中心部分は広大な高原地帯です。富士山が見える最北端といわれていた日山を望みながら、四五九号、一一四号、そして三九九号の三本の国道が離合していきます。

浪江町津島の中心地は、国道一一四号線を東に曲がった界隈にあります。国道三九九号線を走っていると、津島のにぎわいには気がつかず、やがて道は飯館村長泥に向かって、高度を上げていきます。赤宇木（あこうぎ）地区です。あぶくまの峠は、どこも険しい連続カーブとなっていますが、このあたりも、カーブがき



飯館村、長泥の桜の名所。遠方に浪江町請戸の海が見える399の絶景ポイントは、いま住民以外の立ち入りができない。

つくなっています。

津島と長泥の間には、やはり開かずの門があります。津島地区から飯館に入るには、国道一一四号線で川俣へ出て、ぐるっと回って山木屋の有人ゲートから長泥に入るようになります。長泥地区は、原則として長泥地区の住民のみに立ち入りが許されるエリアです。

長泥には、桜並木の一つら折れの峠があります。この地区のみなさんが大事に育てた桜は、今でも誰もいない春に、花を咲かせていますが、これを見ることができない人は、ごくわずかです。そしてこの峠からは、海が見えます。見えるのは、浪江町の請戸港のあたりということです。視界も利く谷筋に添って、原発事故の

放射性物質を含んだ雲が流れてきたのだと、土地の方のお話を聞くことができました。

長泥地区から高度を下げた国道三九九号線は、除染廃棄物置き場となつていくところが多い、飯館の田園地帯を抜けて、飯館村役場の西を抜けて、村の北西で進路を西にとつて、伊達市へ向かっていきます。あくま口マンチック街道は、国道三九九号線が西に進路をとるところを北の起点としています。

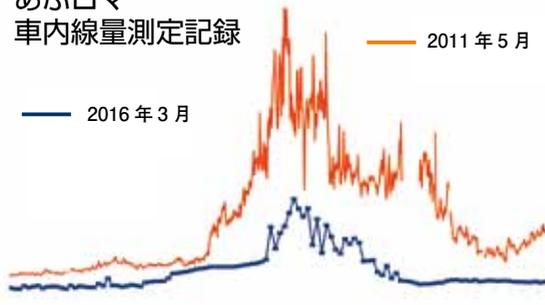
その距離五四、三キロ、迂回なしで走れば、川内村から飯館村まで、ざっと一時間半のドライブです。

震災前は、協議会の集いなどで、地域の真ん中の葛尾村へと、足しげく通った



飯館村を南下すると、長泥の手前でこの先通行止めの案内がある。右は浪江町から葛尾村に南下した光景。

あぶロマ 車内線量測定記録



2011年5月、まだ交通規制が敷かれる前に国道399号線を川内村から飯館村まで走ったときの車内の線量と、2016年3月の同じく車内の線量です。左が川内村で、右が飯館村。最も高いところでは2011年が $18 \mu\text{Sv/h}$ ほど、2016年が $3 \mu\text{Sv/h}$ ほどでした。走りながら市販の線量計の数字を読み取ったものなので、学術的資料価値はありません。横軸は川内飯館間の位置を示しますが、特定できるほど正確なものではないので、表示は示しませんでした。



上は浪江町津島。国道四五九号線との離合付近。下は飯館村長泥地区。帰宅困難区域はまだ除染が入っていないので、あたりは荒涼とした空間が多い。

道。しかし二〇一六年三月時点で葛尾村も全村避難が続いていて、立ち入りはできても立ち寄り先が避難して不在なので、どうしても足が遠のいてしまいます。あぶロマ街道を走り抜ける必要のある人は、ほとんどいないのかもしれませんが、それでも私たちは、いつの日か、あぶロマ街道を自由に走りながら、地域と地域の交流を再開し、共通する風土と、微妙に異なる文化を共有していけると信じています。こんな時代の、こんな環境だからこそ、地域文化を守るからこそ、未来につながっていくのだと思います。それは、この時代にこの地域で暮らしていた人間の、使命のようなものかもしれません。あぶロマでありますように。

あとがき

今、なにをするべきか。

震災後、それぞれの自治体がそれぞれに避難していたこともあり、連絡すらおぼつかない日々が続いていました。川内村役場が避難先としていた郡山のビッグパレットに集まって、お互いの無事を喜びながら、ふるさとを失いかけている今を憂い、そして進むべき道を模索しはじめたのは、二〇一一年夏のことでした。

そして動き始めたのが、地域の郷土料理をかたちにしていくことでした。古式ゆかしいお料理も、直近のみなさんに愛されているお料理も、私たちが残すべき、愛するあぶら料理だと考えました。なので、人生経験豊富な方々にも、お若い方々にも、みなさまにご協力いただきました。

震災後五年が経ち、私たちの地元の人々は、戻る戻らない、住む住まないで揺れています。しかしいつの日か、この本に残された料理を、昔と同じそれぞれの地元でいただける日が来るのを確信して、最後になりましたが、ご協力いただいたみなさまにお礼を申し上げ、著休めしたいと思います。ありがとうございます。

あぶくまレシピ集

あぶくまの郷土料理

平成二八年三月二一日発行

発行

あぶくまロマンチック街道構想推進協議会

〒九七九―二〇一福島県双葉郡川内村

大字上川内字十八窪五〇八の二（事務局）

E-Mail : info@abukumar.jp

URL : <http://abukumar.jp>

会長 飯館村 佐藤 峯夫

副会長 浪江町津島 紺野 宏

葛尾村 松本 順子

田村市都路 佐藤 定信

川内村 西巻 裕

印刷所

株式会社山川印刷所

